



## ちひろからの定期便 「子どものしあわせ」と「こどものせかい」

主催：ちひろ美術館  
協力：至光社

●2022年9月10日(土)～12月4日(日)

いわさきちひろは、日々の暮らしを彩る絵を描きたいと、印刷媒体を発表の場を選びました。絵本とともに、月刊の雑誌や絵雑誌も大切な仕事でした。なかでも「子どものしあわせ」と「こどものせかい」は制約が少なく自由に描けたことから、各時代の代表作が生まれました。

### 「子どものしあわせ」の表紙絵

ちひろは1963年から74年までの12年間、月刊雑誌「子どものしあわせ」(草

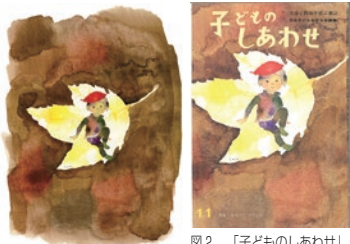


図1 木の葉の精 1973年(草土文化)1973年11月号表紙  
図2 「子どものしあわせ」  
(至光社)1973年11月号表紙

土文化)の表紙絵を描き、150点近くの作品を残しています。「日本子どもを守る会」が編集し、子どもを題材にすること以外どのように描いても構わないという出版社からの依頼は、大変魅力的なものでした。季節感あふれる絵が表紙を飾り、タイトル文字を含めたレイアウトや配色も任されていた本誌の仕事からは、ちひろのデザイン的なセンスもうかがえます。「木の葉の精」(図1・2)では、大胆にトリミングすることで、木の葉と子どもの印象を強いものにしていきます。

### 「こどものせかい」から絵本へ

ちひろは1958年より、至光社の絵雑誌「こどものせかい」の仕事を手がけています。編集者の武市八十雄は、1948年に絵雑誌「ベビーダイジェスト」を発行、翌年に至光社を創立し、1953年より後継



図3 チューリップのなかの男の子 1965年



図4 「こどものせかい」(至光社)1966年4月号表紙

の「こどもの世界」\*を刊行します。武市は、印刷製版にこだわり、絵の再現性を追求していきました。表紙に窓をあけるなど造本にも趣向を凝らした号も見られます(図3・4)。印刷されたものが作品という姿勢は、ちひろの絵本づくりにも生かされ、1971年の『こたりのくるひ』では、コラージュや絵の合成など印刷効果を積極的に用いています。

本展では「子どものしあわせ」と「こどものせかい」を中心に、印刷技術と画風の変遷も併せて紹介します。(山田実穂)

## 〈企画展〉谷内こうた展 風のゆくえ

●2022年9月10日(土)～12月4日(日)

ちひろ美術館としては1997年以来、25年ぶり、そして回顧展としては初めての谷内こうた展を開催します。

### 鮮烈な絵本デビュー

谷内こうたは染色工房を営む家に生まれ、芸術に日常的に触れる環境で育ちます。美術大学の進学を先生にすすめられ、多摩美術大学の油画専攻へ入学するも、時代は大学紛争真ただなな。大学からロックアウトされ、家業を手伝ったり、近所の円谷プロで大道具をつくらしてしていました。そこへ、叔父で、既に「週刊新潮」の表紙絵を描くなど活躍していた谷内六郎に絵本の見本のようなものを描いてみるようにといわれ、考えて描いたものを3冊分持参し、至光社の編集者・武市八十雄へ見せます。武市は、すぐにその場で絵本として出版することを決め、描いた本人を驚かせます。それが、谷内こうたの絵本デビュー作『おじいさんのばいおりん』と、『ぼくのでんしゃ』(図1)でした。なにも知らずに描いたとはいえ、そこには既に谷内の後の作品にも通じる現実と非現実が同居する不思議な空間や、広い空が描かれています。

武市に、いわさきちひろの『あめのひのおるすばん』や、ピネッテ・シュレー



図1 「ぼくのでんしゃ」(至光社)より 1970年

ダーの『おともだちのほしかったルピナスさん』などの絵本を見せられ、今までもっていた絵本の先入観が解け、自由な世界であると知った谷内は、さらに、自分の少年時代の思い出をもとに『なつのあさ』(図2)を描きます。自ら文章も手がけたこの絵本は、汽車の音と風景と想像上の景色が見事につながって展開しており、1971年日本人としては初めてポローニャ国際児童図書展のグラフィック賞を受賞します。



図2 「なつのあさ」(至光社)より 1970年

### ヨーロッパへ

若いころからフランスへ行くという憧れをもっていた谷内は、1971年武市の知り合いの住んでいるドイツの田舎町エバーバッハへ渡り、その家族とともに暮らし始めます。毎日のように油絵を描き、夏休みにはリュックひとつで旅へ出かけ、絵本は年に一冊描くという生活を2年半ほど続けます。今まで公開されることなかった、この時期に描いた油絵を本展では展示します。

村の景色を少し遠いところから見て描いたと思われるこの作品(図3)には、

主催：ちひろ美術館  
後援：(一社)日本国際児童図書評議会、絵本学会  
協力：谷内富代、至光社、平凡社、ギャラリー杉野



図3 村の入り口 1971-73年

どこか初々しさが感じられるものの、欧州の秋の季節の空気や光が感じ取れます(図3)。

1973年には念願のフランスへ移り、そして結婚し、長女が生まれるときに日本に帰国。1983年に再びフランスへ戻り、2019年に71歳で亡くなるまでノルマンディーの地で絵を描き続けました。

### 風と光と

谷内の約30冊の絵本や、数多くの雑誌の表紙絵などのイラストレーション、そしてさまざまな大きさのタブロー。それらを見ると、彼の作品の多くが風景画であることに気づかされます。影の長さが変わっていく夕方の街、月の明るい空、熱い風の吹く浜辺……。バラの花の咲く庭や、緑がまぶしい川辺の道。「最初、ヨーロッパに来た時、いつまでいるかわからないし、風景は日本では描けないから今のうちに風景をいっぱい描いておこうという意識があったけれど、やっぱりだんだん好きになっていきましたね。」と語っているように、描き続けるうちに、風景を描くことが好きになっていったのでしょうか。フランスの光は違うともっていた谷内は、生まれながらの画家でした。彼の50年近い画業のなかで生まれた作品の数々をご覧ください。(松方路子)

# くらし、えがく。ちひろのアトリエ

●2022年10月8日(土)~2023年1月15日(日)

いわさきちひろが22年間を過ごした練馬の自宅の跡地に建つちひろ美術館・東京には、今から50年前の、1972年当時のアトリエのようすが復元されています。画机や本棚などの愛用の品々が遺されたアトリエからは、時を経た今も、ちひろの人物像を偲ぶことができます。

本展では、家庭も仕事も大切にしたいちひろの生き方を、折々の作品やちひろのことば、写真や資料などを通して紹介します。

## 画家としての出発点——神田の下宿



図1 屋根裏のアトリエで本を読む自画像 1947年頃

ちひろは第二次世界大戦敗戦の翌年、27歳のときに、自立して生きようと疎開先の信州から単身東京に戻り、神田の叔母の家の屋根裏部屋に間借りして(図1)、働きながら絵の勉強を始めました。次第に新聞や雑誌などに仕事を広げるなか、1948年には近所のブリキ屋の2階の六畳一間に移ります。1950年1月、7歳半年下の松本善明と、ふたりだけの結婚式をあげたのもこの部屋でした。戦前の家制度の考え方が根強く残り、女性が社会のなかで働くことが困難だったこの時代、ちひろは結婚に際して、夫との間に「芸術家としての妻の立場を尊重すること」の一言を入れた誓約書を交わしています。

## 家族との日々——練馬のアトリエ

翌年、ちひろは息子を産み、母となりました。しかし、狭い下宿での育児と仕事の両立は厳しく、信州・松川村の両親のもとに息子を預けざるをえなくなりました。息子と離れて暮らしたおよそ半年間、ちひろは懸命に働き、時間ができると遠い実家まで息子に会いに出かけたといひます。



図2 アトリエの自画像  
「わたしのえほん」(新日本出版社)より 1968年

練馬区下石神井に家族3人が住める小さな家を建てたのは1952年の春のことでした。以後ちひろは、この家で、くらしと仕事の両方を大切にしながら、人生を切り拓いていきました。

当初は居間の一角を仕事場にして、子育てをしながら絵を描いていましたが、1963年、夫の両親との同居をきっかけに2階を増築、自分のアトリエをもつようになりました。この部屋で、ちひろはさらに仕事を充実させ、1960年代後半からは絵本制作へと力を注いでいきました。

## 自然のなかのアトリエ——黒姫山荘

1966年には、信州北端の黒姫の地に、建築家の奥村まことに設計を依頼して、もうひとつのアトリエとなる山荘を建てました。春から秋は「野花亭」、冬は「雪亭」と呼んだこの山荘は、都会の喧騒から一時離れ、創作に専念できる大切な場所でした。豊かな自然からインスピレーションを得ることのできた黒姫山荘では、娘時代から愛読していた宮沢賢治の童話に絵を描いた『花の童話集』などの作品が生まれました。



図3 ストープに薪をくべる少女 1973年

## ちひろの1972年

ちひろの画業のなかでも、1972年はとりわけ充実した1年でした。月刊誌「子どものしあわせ」や「こどものせかい」の表紙絵にも、それまでのさまざまな試みの集大成ともいえるほど、幅広い表現を見ることができます。絵本では、3月に『ひさの星』、10月に『母さんはおるす』、11月に『あかまんとうげ』、そして12月には『ゆきのひのたんじょうび』を出版しました。

1970年代に入ってますますベトナム戦争が激しさを増すなかで、解放軍の女性兵士グエン・ティ・ウットと5人の子どもたちをモデルにベトナム作家が書いた短編小説の絵本『母さんはおるす』は、ちひろが「積極的に喜んで描いたもの」だといひます。この絵本の制作にあたって同年5月には、「ぐるーぷ車」の展覧会にベトナムの子どもの姿を描いた

主催：ちひろ美術館

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区



図4 赤い毛糸帽の女の子  
『ゆきのひのたんじょうび』(至光社)より 1972年

「子ども」(図5)と題した3点の絵も出品しています。その絵を岩崎書店の編集者が見たことがきっかけとなり『戦火のなかの子どもたち』の制作が始まりました。当時のインタビューから、ちひろの思いを知ることができます。「平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。」「\*1「ベトナムの本を続けてやるのも、私はあせって、いましなければベトナムの人は、あの子どもたちはみんないなくなっちゃうんじゃないかと思って……。 (中略) たくたでたいへんなんだけど、私のできる唯一のやり方だから、とてもあせって、いまそんな切実さがすごくあるんです。」「\*2

数多くの仕事を手がける一方で、息子の大学受験、半身不随の母の介護、衆議院議員の夫の選挙など、大家族を支える主婦としても多忙を極めた年でした。胃の具合を悪くしながらも、「大事な人間関係を切っていくなかでは、特に子どもの絵は描けない」\*2と語っています。

エッセイ「大人になること」\*3に、ちひろは次のように書いています。「自分のやりかけた仕事を一歩ずつたゆみなく進んでいくのが、不思議なことだけこの世の生き甲斐なのです。(中略) 大人というものとはどんなに苦勞が多くても、自分のほうから人を愛していける人間になることなんだと思います。」ちひろが55年の生涯を閉じたのは、2年後の1974年のことでした。その3年後にちひろ美術館が開館、今もちひろの仕事や思いを受け継いで活動しています。(上島史子)



図5 戦火のなかの少女  
『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)より 1972年

\*1 「わたしの生きがい」 インタビュー記事より (掲載紙不明)

\*2 「教育評論」1972年11月号 (日本教職員組合)

\*3 「ひろば」1972年4月 (至光社)

## 平和への願いを伝える活動

### 平和絵はがき、平和の展示、憲法カードの取り組みについて

2022年2月24日、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まり、今なお子どもを含む多くの人々が戦火にさらされています。ちひろ美術館では、今あらためて、いわさきちひろの平和への思いを伝える活動に取り組んでいます。

5月中旬から、『戦火のなかの子どもたち』やちひろが描いた1963年当時のキーウのスケッチ、ロシアの画家エフゲニー・ラチョフがウクライナ民話を絵本にした『てぶくろ』の作品など、7枚の絵はがきをセットにした平和絵はがきの頒布に取り組んでいます。製作費をのぞいた売り上げは、国際機関（UNHCR、

unicef など）を通して、ウクライナへの支援に役立てられます。

安曇野ちひろ美術館では、6月4日より、急遽、展示内容を変更して、ピエゾグラフによる小企画展示「世界中の子どもみんなに 平和と しあわせを」を開催。平和絵はがきの収録作品を中心に紹介し、ちひろの願いに触れる機会としました。

6月末には、戦争や平和について、考えたり話し合ったりするきっかけになればと「憲法カード」を新たに作成。ご希望の方には手渡しをしており、当館ホームページよりダウンロードもできます。

戦時下で青春時代を過ごしたちひろは、

戦争で一番弱いものが犠牲になることを痛感しました。生涯、子どもの幸せを願って描き続けたちひろの想いを伝え、子どもたちが安心して健やかに暮らしていける未来の実現を目指し、ちひろ美術館はこれからも、平和であることの大切さを発信していきます。（高津つぐみ）



憲法カード（左は日本国憲法前文、右は第9条を裏面に記載。ハガキサイズ。）

### 企画展 「江戸からいまへ 日本の絵本展」関連イベント

#### ●2022年7月24日(日) 西村繁男講演会「日本の歴史を絵本に描く」

絵本画家・西村繁男さんが自身の絵本づくりを語るオンライン講演会を開催しました。一部を紹介します。（川添さやか）

##### 内田麟太郎さんとの絵本づくり

内田さんとの最初の絵本は『がたごとがたごと』（1999年 童心社）。チャンバラ驛に登場する「児雷也」は子どものころからメンコや漫画でよく知ってました。時代劇も大好きで、この場面には猿飛佐助をはじめ、僕が知っている知識をいろいろ散りばめています。そして20年たって内田さんが続きを書いてくれたのが『たたたん たたたん』（2019年 童心社）です。内田さんの原稿にはいつもト書きがついています。一行二行、ちょっと書いてあるのですが、それがヒントになる。僕は内田さんが考えた以上のことを展開したい、喜んでほしいと思って描くんです。こうしたいというのが、僕のなかに自然に出てくるんですね。

##### 日本の歴史を絵本に描く

『絵で見る日本の歴史』（1985年 福音館書店）は、本の大きさもページ数も、展開や話の進め方も自由、ただ、ページをめくるときに時刻や季節や天候に変化をつけてほしいと。描けなくて2年半くらい迷いました。学校で習った歴史を描こうとしても自分らしくない。ある日、ふと「歴史はたくさん普通の人がいてでき上がっている」ということに思い至ったとき、この視点なら描けると思いました。大型の絵本になったのは、たくさんの人を描きたいから。俯瞰の構図ならいろいろな人が描けます。絵巻物などできるかぎり資料を手に入れて描きました。絵巻については、絵本を始めるころに「絵巻展」（1974年 東京国立博物館）を観て、こんなすごい世界があったんだと驚きました。この本の10年後に描いたのが『絵で読む 広島原爆』



（1995年 福音館書店）です。文を手がけた那須正幹さんは3歳のころに被爆された方で、広島原爆がわかる絵本を頼まれていた。『ほくらの地図旅行』（1989年 福音館書店）でごいっしょして、僕と原爆の本もできると直感してくださった。僕は僕で原爆のことが自分のなかの宿題で、いつか原爆の本をつくらなければという思いがあった。広島に半年ほど住んで、たくさん証言を聞きました。あの日、爆心地近くの建物疎開の作業に二中の生徒を含め、たくさん子どもたちが動員されて、ほとんどが亡くなった。本のなかで空を飛んでいるのは、その二中の少年。なにも知らない僕にいろんなことを教えてくれる、そういう存在です。

## 窓

### 子どもたちが繯い続ける「平和」

竹迫祐子（公財）いわさきちひろ記念事業団

「びじゅつかんへお出かけ」と始まる沖縄の小学2年生、徳元穂菜さんの詩。穂菜さんは、家族揃って出かけた美術館で「たくさんの人たちがしっていて／ガイコツもあった／わたしとおなじ年の子どもが／かなしそうに見ている」悲しく怖い情景を描いた絵を観ます。それが77年前の沖縄で本当にあったことだとお母さんから聞いて、「戦争の反対は何？」と考えます。そしてこの詩「こわいをして、へいわがわかった」\*1をつづりました。

戦争の実相を、自分の目や耳で知ろうと行動する高校生もいます。1977年、広島元安川で原爆瓦を発見したことから、被爆の体験を知り理解し世界に伝えていこうと、広島高校生平和ゼミナールは生まれました。当初30年間のようすがドキ

ュメンタリー映像\*2にまとめられていますが、そのなかで、高校生たちは「私たちは最後の子どもになりたくない。戦争はいらない／飢えはいらない／暴力や差別はいらない／私たちが欲しいのはただ平和だけ」と語り、「原爆投下は仕方なかったと思う人も、許せないと思う人も、もう二度と核兵器を使わせないという思いでは一致できるはずですよ」と語っています。今日、高校生平和ゼミナールは国内外各地に活動を広げています。

今夏、長野県の駒ヶ根市立博物館では戦争末期の1944年に同地に疎開してきた旧陸軍科学研究所、通称「登戸研究所」の企画展が開催され、地元の赤穂高校平和ゼミナールによる記録や証言収集の活動も紹介しています\*3。同展では、中学生

が「缶詰爆弾」の製造に動員されたことや、敗戦後の資料・資材の隠蔽作業中に伊那村国民学校で起こった「毒入りチョコレート」誤食事故などに触れ、同研究所の謀略戦研究機関の実態を伝えています。

南アルプス子どもの村中学校の中学生は、ロシア・ウクライナをはじめ、世界で行われる武力支配に対して、「対話を！」という声明を出しています。「私たちは、いやなことあるときはミーティングをひらき、話し合いで解決してきました／これは社会や国家間でも同じだと思います」と語り、「どうか大人の方々も一緒に考えて、動いてほしいと願います」と訴えています\*4。

私たち大人は、子どもの真つすくな訴えに、真摯に向き合わねばなりません。

東京  
美術館  
日記



広島から八里の道を歩いて帰ってきた少女 1967年『わたしがちいさかったときに』(童心社)より

**7月21日(木)** ☁  
聞こえない子、聞こえにくい子のための都内の小学校から1、2年生16名と先生が来館。館内のスタッフの説明を先生方が手話で伝えてくださり、ちひろや作品への理解を深めてもらう。図書室ではちひろの絵本を開きながら手話で説明する先生の前集まり、熱心に見つめる子どもたちの姿も。たくさん子どもたちが集まっているのに静かな空間で、互いの姿を見ながら、みんなの両手が忙しく動



いている。静寂のなかで活発なコミュニケーションが行われる光景に心を打たれる。

**7月28日(木)** ☀  
今週に入ってから突然美術館の庭にセミの音が響くようになり、夏の訪れを実感する。通用口近くに植えてあるバラは、咲き終えた花の剪定跡から新芽が伸び、今年二度目の開花。鮮やかなピンクに縁どられた白い花は5月よりは小ぶりだ。可憐な姿のなかに、連日の暑さにも負けず花を咲かせる自然の大きな力を感じさせる。

**7月31日(日)** ☀  
3ヶ月ぶりの美術館常任顧問・松本猛によるギャラリートーク。感染症対策のため参加人数は限定されたが、小学生からシニアの方

で年齢もさまざまな顔ぶれが、制作のようすなどのトークを聞きながら展示を楽しむ姿が見られた。

**8月1日(月)** ☁  
NHKあさイチの特集「一生使える!ミュージアムの楽しみ方」で、平和についてのミュージアムとして当館が取り上げられた。自らの戦争体験から平和を願って描いたちひろの『わたしがちいさかったときに』より、広島で爆撃された女の子の作品が紹介される。あわせて、そのあまりの美しさに感動したというちひろのことばとともに、生前に訪れたウクライナ・キーウのスケッチも紹介された。ちひろが描いたのどかな光景とは対照的な現在のこの街と人々のことを思うと、胸が痛む。

安曇野  
美術館  
日記

**6月9日(木)** ☀  
修学旅行などの学校来館が増えてきた。見学のあと、男子中学生たちがこぞって「トットちゃんの電車クッキー」を買う姿がほほえましい。

**6月14日(火)** ☀  
絵本カフェでは「ちひろ 雨の日 晴れの日」の展示をイメージしたクッキーが好評。松川村の「じみじみおやつ」さんによる、雲や雨のしずくのかたちのクッキーに、会話もはずむようす。笑顔になれるやさしい味わいのおやつで、一息ついてもらいたい。

**6月19日(日)** ☀  
「絵本から飛び出せ!動物たち」展に関連して「動物園の飼育員さんに聞いてみよう!絵本の動物たちのリアル」を開催。長野市の茶



白山動物園の飼育員、高田孝慈さんによるスライドトークでは、動物のプロの視点で絵のなかの動物について解説してくださり興味深い。シマウマとツキノワグマの毛皮も展示し、参加者はおそろおそろ触って本物の感触を確かめる。まさに「絵本から飛び出した」動物たちを楽しむひとときとなった。  
**7月5日(火)** ☁  
中庭に住みついたツバメの家族。くちばしの黄色いヒナたちが成長

し、飛び立つ練習が始まった。毎朝ヒナの様子を確認するのが楽しみだったが、巣立ちは今すぐ。

**7月18日(月・祝)** ☀  
彫刻家の中野滋さんが来館、立体作品「洗濯女たち」の修復作業を行う。欠けた小さな瓦屋根をひとつひとつ手作業で修復。美しくよみがえった姿で展示を再開した。

**7月19日(火)** ☁のちひろ  
3年ぶりに長野県立こども病院での展示作品をかけ替える。昨年8月8日のちひろ忌でいただいた寄付を使って新たに制作したピエゾグラフィ作品を展示。「過酷な治療の合間に歩く廊下にちひろ作品があることで、癒されている子どもたちも多いと思います」とのことばに、はげまされる。



小鳥とあかちゃん 1970年

ひとこと  
ふたこと  
みこと

**東京館 7月10日(日)**  
4か月の息子と、First美術館。雰囲気もよく、落ち着いた美術館。息子もうれしそう。楽しそう。また来ます。 サヤ、アカリ

**7月16日(土)**  
明日の保育者たちといっしょに来館。子どものしあわせと平和への思いが、若い、明日の保育者に引

**安曇野館 6月27日(月)**  
中学生の時、週末になると上井草のちひろ美術館に行きました。(中略)大人になり、母になり、自分の中学時代を振り返ったとき不安定な気持ちに激しく揺れ動いていた中学生という多感な時期を、ちひろさんというひとりの女性の存在と絵本の豊かな世界が支

き継がれていくことをうれしく思います。

**7月18日(月・祝)**  
ちひろ美術館は、私が生まれた日にお母さんが訪れた場所なので、少し特別です。またお母さんといっしょに来たいです。 あかり  
**7月18日(月・祝)**  
7か月ぶりに来ました。この間

に、世界は大きく変わってしまいました。この世から戦争がなくなっていないこと、世の中で起きていることが現実のこととは思えません。今日は『わたしがちいさかったときに』を読みました。ちひろさんが訴えてこられた、戦争のない、あたりまえの日常が、一日も早く訪れるよう祈ります。

えてくれていたのだ…ということが、今ならよくわかります。田村  
**7月3日(日)**  
作品をみて思ったこと…なんかすごい!!私には絵にたいする知識がぜんぜんないからうまくことばに表せないけど、個人的には、作品の「目」が好きです。なんかこう、やさしいかんじ?ずっとみつ

められてて、いやな気がしないって… Yより  
【中学生ボランティアと楽しむ 絵本の読み聞かせ 感想より】  
地元の中学生がロングセラーの絵本をすてきに読んでくれて、とてもうれしくなりました。こうやって絵本のよさが伝わっていくのだなと感じました。



どろんこの少年 1970年

## ちひろ美術館(東京・安曇野) イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、各館へ。ちひろ美術館・東京 TEL.03-3995-0612 安曇野ちひろ美術館 TEL.0261-62-0772  
 下記のイベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。 chihiro.jp   

## 【ちひろ美術館・東京で開催のイベント】

〈くらし、えがく。ちひろのアトリエ 展示関連イベント〉

## ●講演会「奥村まことが設計したちひろのアトリエ」(オンライン)

○日時：10月16日(日) 14:00~15:00  
 ○講師：村上藍(『奥村まことの生涯とその設計』著者)  
 ○参加費：500円 ○定員：70名 ○申し込み：Peatixにて受付

## ●講演会「ちひろのアトリエ」(オンライン)

○日時：11月13日(日) 14:00~15:00  
 ○講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)  
 ○参加費：無料 ○定員：70名 ○申し込み：Peatixにて受付

## ●親業講演会

○日時：10月29日(土) 10:00~12:00  
 ○講師：田中満智子(親業訓練協会インストラクター)  
 ○対象：大人(未就学児の同伴も可)  
 ○定員：8組16名  
 ○申し込み：要事前予約(9月29日(木)より受付開始)

## ●わらべうたあそび

○日時：11月19日(土)  
 ○講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表・はとさん文庫主宰)  
 ○対象：0~2歳11ヶ月と保護者  
 ○申し込み：要事前予約(10月19日(水)より受付開始)

## ●ワークショップ あなたの『好き』を描こう、つくろう

○日時：12月10日(土) 14:00~15:30  
 ○講師：富田めぐみ(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表)  
 ○対象：外国語を母語とする3~6歳児と保護者(英語対応あり)  
 ○申し込み：要事前予約(11月10日(木)より受付開始)

## ●あかちゃん/子どものための鑑賞会・ワークショップ

○日にち：12月11日(日)  
 ○講師：富田めぐみ(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表)  
 ○対象：0~2歳児 10:30~12:00  
 3~6歳児 14:00~15:30  
 (外国語を母語とする家族を含む、英語対応あり)  
 ○申し込み：要事前予約(11月11日(金)より受付開始)

## ●目の見えない白鳥さんといっしょにちひろの絵を楽しもう

○日時：1月8日(日) 14:00~  
 ○ナビゲーター：白鳥建二(全盲の美術鑑賞者、写真家)  
 ○対象：大人 ○定員：5名  
 ○申し込み：要事前予約(12月8日(木)より受付開始)

※上記イベント申し込みは、美術館公式サイト、TEL.03-3995-0612にて受付 詳細は決まり次第、公式サイトにてお知らせします。

## ●ギャラリートーク

第1・第3土曜日14:00~14:30  
 ○参加費：無料(入館料別)  
 ○定員：15名  
 ○申し込み：当日受付

## ●絵本のじかん

第2・第4土曜日11:00~  
 ○参加費：無料(入館料別)  
 ○定員：15名  
 ○申し込み：当日受付

## 【安曇野ちひろ美術館で開催のイベント】

〈谷内こうた展 風のゆくえ 展示関連イベント〉

## ●トークイベント「谷内こうたとの思い出を語る」

○日時：9月10日(土) 13:30~14:30  
 ○講師：谷内富代(谷内こうた妻・フランス在住)  
 ○会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー  
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：30名  
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)

## ●講演会「谷内こうたの絵本を語る」

○日時：11月3日(木・祝) 14:00~15:00  
 ○講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)  
 ○会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー  
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：30名  
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)

〈ちひろ美術館コレクション 絵本画家の絵の具箱 展示関連イベント〉

## ●出久根育アトリエトーク(オンライン)

○日時：10月1日(土) 17:00~18:30  
 ○講師：出久根育(絵本画家・チェコ在住)  
 ○参加費：700円 ○定員：70名  
 ○申し込み：Peatixにて受付



## ●あかちゃんとお出かけしよう!ファーストミュージアムデー

○日時：11月19日(土) 10:00~11:00  
 ○対象：0歳から2歳の子どものとその保護者  
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：親子10組  
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)

## ●学芸員によるスライドトーク

○日時：9月25日(日)、10月23日(日) 14:00~ちひろ展  
 /14:30~谷内こうた展  
 ○参加費：無料(入館料別)  
 ○定員：20名  
 ○申し込み：不要(参加自由)

## ●絵本のじかん

○日時：毎月第2・第4土曜日  
 11:30~12:00  
 ○参加費：無料(入館料別)  
 ○定員：20名  
 ○申し込み：不要(参加自由)

【ちひろ美術館、東京、安曇野ちひろ美術館 共通で開催】

## ●敬老の日

○日にち：9月19日(月・祝)  
 65歳以上の方は入館無料(受付にてお申し出ください)

## ●休館のご案内

【安曇野館】  
 ○冬期休館：2022年12月5日(月)~2023年2月末日  
 【東京館】  
 ○年末年始休館：2022年12月28日(水)~2023年1月1日(日)  
 ○冬期休館：2023年1月16日(月)~2023年2月末日(予定)  
 ※2023年の展覧会情報は、決まり次第公式サイトにてお知らせいたします。

CONTENTS 〈安曇野ちひろ美術館〉ちひろからの定期便「子どものしあわせ」と「こどものせかい」／〈企画展〉谷内こうた展 風のゆくえ…②／〈ちひろ美術館・東京〉くらし、えがく。ちひろのアトリエ…③／〈活動報告〉平和への願いを伝える活動／西村繁男講演会「日本の歴史を絵本に描く」／窓…④／東京・安曇野美術館日記／東京・安曇野ひとことふたことみこと…⑤

美術館だより 合併号 No.216/109 発行2022年8月30日